

異なるなく十歳の時先代山勢檢校に就き箏曲を學ぶ漸く十三四歳頃よりして修業に餘念なく彈琴の絶ゆる時なし隣家の前田氏試みに氏の彈琴止むを待て喫煙せんと己れも共に其業を働きしに遂に止む時なかりしかば其勉學に負けて一吹せりと云ふ氏が幼時の勉勵此の如し後日大偉人となるも亦偶然にあらざるなり

氏獨り箏曲のみの研究に止まらず三絃の必要なるを感じ嘉永五年五月杵屋六四郎氏の門に入りて該樂を學ぶ氏已に其業の熟せるに及び箏曲指南に従事し名を山清まよ勾當けいご慶賀一と稱す實に萬延元年四月より明治元年先師の遺業を繼ぎ松韻と改む爾來箏曲の業に専任しつゝありしが明治十三年六月音樂取調掛員を命せられ同十九年訓盲啞院備を拜命し同廿年三月工藝品共進會審査員を依頼せらる同廿二年一月琴曲會を開き収益を養育院へ寄附せしにより木盃を下賜せられ同廿二年二月箏曲集第二編校正を囑托せらる同廿三年権少ごんしょう教正きょうせいに補し廿四年四月東京音樂學校教授に任せられ奏任官六等に叙せらる同時に東京盲啞學校教授を囑托せらる同年十二月正八位に叙す

氏はかく公務に鞅掌わうしやうしありと雖も又一方には民間子弟に箏曲を教授し明治六年より廿六年に至るまで門下にありて薰陶を受け免許を得し者千有五十七名内箏曲指南に従事せる者五十四名與許を得し者貳百十五名ありとされば音樂界に恩澤ある實に少々にあらざるなり且つ氏常に弟子を誡めて曰く世間何樂を問はず其善惡よしあしを評論すべからず人各其特性あり能技あり知らざる處に妙を有し思はざる所に機變あるものなれば必ず謹で其眞意を味はざるべからずと實に弟子たるべきものゝ心得べき格言にして氏が人の師表となる亦自ら言外に存すと云はざるべからず

殊に氏の箏曲に於ける方針に就て實に記憶せざるべからざる事は古來本邦箏曲に改良を施すの一事にあり氏は時勢の已むべからざるを觀破せられ歌曲を西洋音符の組織に改め何人も必ず一目以て瞭然たらしむるに務めたり是れ琴曲家の一大勇舉にして本邦音樂の變遷を早からしむるの良策なり今や氏は此針路を取り孜孜として従事するを以て名聲は是と共に噴々たり

内田彌一(うちだ やいち) 東京府平民

履歷(要約)

天保十二年(一八四一)八月生れ。

明治二年(一八六九)八月二十二日大學南校少助教に任せられる。同四年

九月二十五日大學南校辭職。

同五年(一八七二)八月二十五日正院反譯局十等出仕用し付けられる。同

八年九月二十日正院反譯局辭職。

同十三年(一八八〇)六月七日音樂取調掛に取調員として出勤一ヶ月金十

五円。

同十四年(一八八一)五月十八日文部省御用掛に任せられ、取扱判任に準

し月俸金二十円。九月からは三十円となり、監事兼音樂取調掛申し付け

られる。『音樂指南』の譯業ならびに講義、唱歌の授業を受け持つ。さ

らに俗曲改良を担当。

同十九年(一八八六)三月三十一日音樂取調掛非職を申し付けられる。

明治二十四年(一八九一)十二月二十八日大逋信省より臣官房報告課勤務

を命じられる。月俸金二十円。

同二十六年(一八九三)十二月一日郵便為替貯金書記補月給金十五円交付

される。

同三十一年(一八九八)五月三日非職を命ぜられる。

同三十六年(一九〇三)八月三十一日東京音樂學校雇いとなり大正六年ま

で俸職した。

内田彌一は専門家をしのぐほど長唄に長じていたと伝えられる。この履歴には長唄に関する修業歴がないが、彼が明治四十一年七月に記した「長唄ニ関スル考案」の中に、次のような長唄修業の自己紹介があった。

生ハ素ト旗下ノ家ニ生レシカ、幼稚ノ頃ヨリ性来音楽ヲ好ミ、十五、六才(安政年間)ニ至テ文武修業ノ余暇ヲ以テ近隣ノ嗜好家ニ三絃ノ雜曲ヲ学フ。後チ某女師ニ就テ富本、清元ノ唱謡ヲ学フ事三、四年、然ルニ我カ嗜好に適セス。依テ爾後審カニ長唄ヲ聴取シ、始テ三絃ノ妙ハ爰ニ在ルヲ悟リ、二十一歳(文久年間)ノ春、當時有名ナル杵屋弥吉(後チ弥十郎ノ名籍ヲ継ク)ニ就キ三絃ヲ修業スル事四、五年、然ルニ聯カ感スル処アリテ憤然志ヲ転シ、其唄謡ヲ以テ世ニ鳴ラント欲シ、一日之ヲ師ニ請ヒシニ、師モ亦幸ニ之ヲ許ス。是ニ於テ爾後職務ノ余暇之カ修業ニ粉骨勉勵スル事幾数年、其ノ傍ラ歌沢ヲ学フ。其師さく、勝蔵ハ當時共ニ有名ノ者。其後チ数年ニシテ時恰モ維新ノ際ニ接ス。不幸ニシテ之ヲ中止スルノ已ムナキニ至レリ。後チ明治三、四年ノ頃、更ニ復其ノ志ヲ起シ、當時有名ナル杵屋六松、唄謡師岡安喜代八、全喜代松等ニ就キ専ラ唄謡ヲ学フ事多年。後チ又杵屋三郎助(元音楽取調掛雇員)ニ就テ愈々其技練磨シ、漸ク独吟ヲ以テ一席ニ四、五曲ヲ連唱スルノ技ヲ得ルニ至タリ。是ニ於テ数々友人ヲ介シテ貴顕紳士ニ招聘セラレ、聯カ賞讃ヲ辱ウスルヲ得タリ。然ルニ悲カナ、近年齡老テ発声意ノ如クナラス。

(蒲生郷昭氏「東京国立文化財研究所音楽舞踊研究室室長」の校訂による)

彼の翻訳書の主なものにボナブキヤン・ホント著『音楽歴史』第三章「楽術の略説」訳稿およびL・W・メーソン著『音楽捷徑』(明治十六年四月)がある。前者は音楽取調掛の音楽史の授業用テキストであった。

岡倉覺三(天心)(おかくら かくぞう)

履歴(要約)

文久二年(一八六二)十二月二十六日横浜本町一丁目の自宅に生る。幼名角藏。

明治二年(一八六九)ジョン・バラに就き英語學習を始む。

同六年(一八七三)官立東京外國語學校に入學す。

同八年(一八七五)官立東京開成學校に入學す。名を覺三と改む。

同九年(一八七六)奥原晴湖女史に就いて南画を学ぶ。

同十年(一八七七)四月東京開成學校改めて東京大學となる。文學部に入り政治學・理財學を學ぶ。

同十三年(一八八〇)七月東京大學卒業、文學士となる。十月十八日文部

省御用掛、音楽取調掛を命ぜらる。月給四十五円。〔主に外国文書の翻訳とメーソンの通訳を担当。〕

同十四年(一八八一)十一月文部省専門學務局勤務となる。音楽取調掛兼務。

同十五年(一八八二)四月文部省音楽取調掛を免ぜられ、内記課兼務となる。夏フェノロサ及びビゲローと京都・奈良地方古社寺を歴遊す。九月九鬼文部少輔に随伴し、京畿の古社寺を巡遊す。

以後、十九年文部省国画取調掛掛員、二十三年には、東京美術学校長となつて、日本の美術界に君臨する。大正二年(一九一三)九月二日静養先の赤倉山荘で没した。同日従四位に叙し、勲五等双光旭日章を授けられた。